



グランドラクモンの身体が、黄金の間へ溶け始めていた。かつて無量塔リョウスケ達を獲物として追い詰めていた吸血鬼の王は、今や膝を折り、崩壊するデータを必死に繋ぎ止めている。威厳も、余裕も、支配者としての美しさも、もうそこには残っていなかった。

「ひどい顔」

アシェンプモンは、楽しげに囁いた。

「逃げる相手を追い回すのは好きだったのでしょうか？なら、追い詰められる側の気分も、最後まで味わわなくちゃ」

指先が、グランドラクモンの頬へ触れる。壊れかけた玩具の確かめるような、冷たく丁寧な仕草だった。

リョウスケは何も言わなかった。Death-Xの真相を聞けたらいいと思っていたが、思いついた頃にはもうグランドラクモンの下半身が溶けていて時間がなさそうだったからだろう。

「安心して。無駄にはしないわ」

アシェンプモンは、崩れていく魔獣の残骸を見下ろして微笑む。

「あなたの力も、記憶も、誇りも、全部わたしの中に入れてあげる。二度と誰かを見下ろせない代わりに、わたしの一部として使ってあげる」

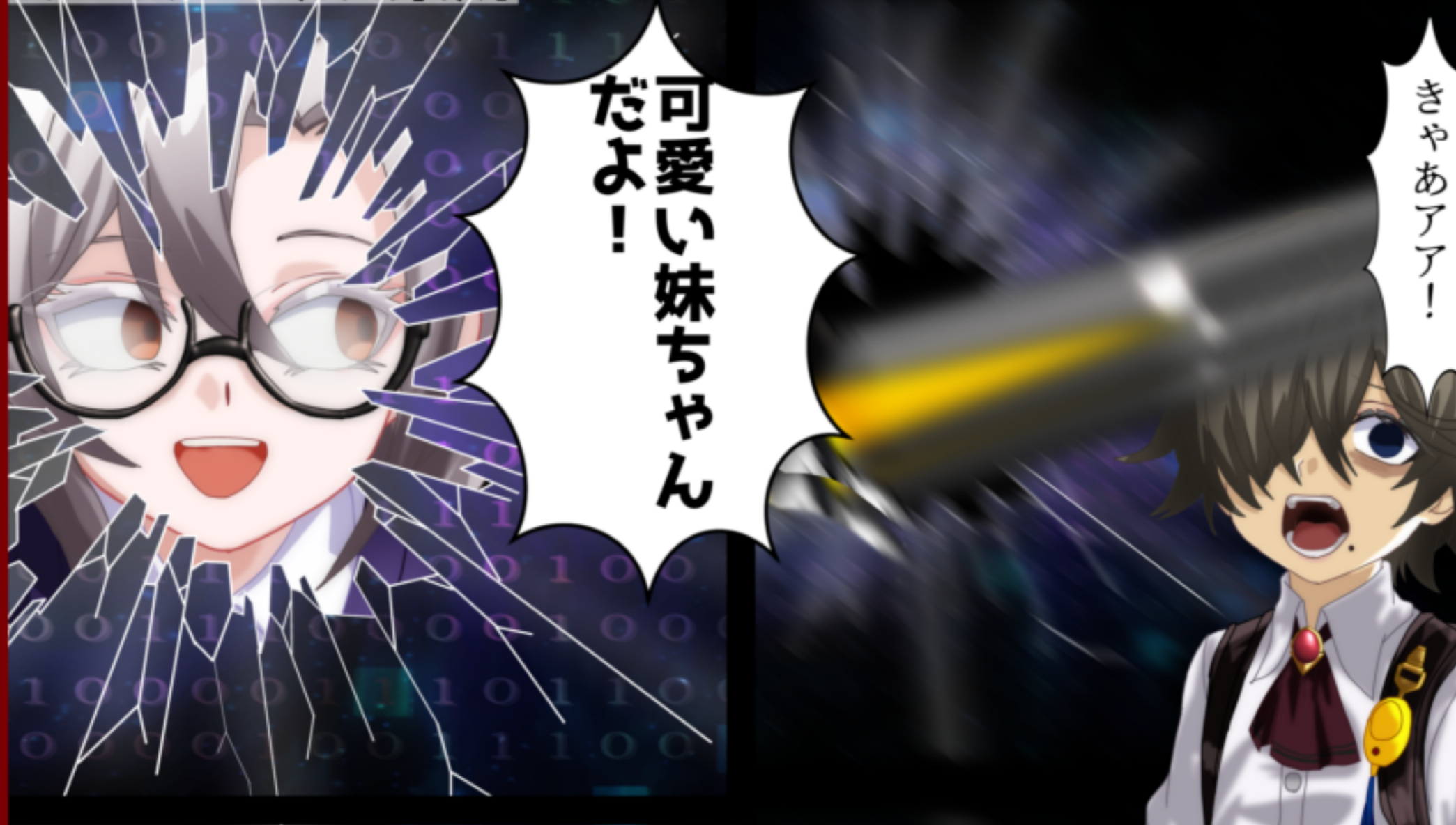
次の瞬間、グランドラクモンのデータが剥がれ落ちた。悲鳴は途中で途切れ、黒い粒子となってほどけた魔獣の情報が、アシェンプモンの身体へ吸い込まれていく。

彼女は恍惚とした息を漏らした。強大な吸血鬼のデータが、内側で軋み、暴れ、やがて沈黙する。抵抗はあった。だが、それもすぐに彼女の力として組み替えられていく。

「……いい子」

アシェンプモンは、自分の胸元に手を添えて笑った。グランドラクモンはロードしたことで、残す敵は最も厄介な『ボルバウタモン』のみとなった。

## ダークエリア某所



割れた空間の向こう側から顔を覗かせたのは、妹の無量塔聡美。

「兄さん、滅っしに来ましたよ！」

その声は、再会を喜ぶものではなかった。  
間違った家族を、力づくでも連れ戻そうとする者の声だ。

リョウスケは目が泳いでいた。妹。  
そして、パートナーの実力ではこちらを上回る、今は会いたくない相手だ。

「リョウスケ」

背後で、アシェンプモンが彼の名を呼んだ。

「なに固まっているの？まさか、可愛い妹ちゃんが迎えに来てくれたから嬉しくなっちゃった？」

アシェンプモンはわざとらしくリョウスケの肩へ手を置き、職美へ微笑みかける。

「残念。遅かったわね、妹ちゃん」

その声は甘く、底意地が悪かった。

「この人はもう、あなたの知っているお兄ちゃんじゃないの。私のために殺して、私のために奪って、私のためにここまで来た。つまり、もう私のもの」

アシェンプモンは、彼を慰めているわけではない。  
優しく背を押しているわけでもない。  
彼女は、わざと最悪の言葉を選んでいた。

「兄妹ごっこを続けたいなら、他所でやってくれる？この人にはまだ、私のために働いてもらうことがあるの」

聡美の視線が鋭くなる。  
割れた空間の奥で、握られた剣が光を返した。



「あなたは、兄さんのパートナーとして不適格です」

兄妹の問題に入り込んできた異物を、淡々と仕分けるような視線だった。アシェンブモンの唇が、薄く吊り上がる。

「まあ。初対面でそこまで言えるなんて、ずいぶん礼儀正しい妹ちゃんね」

「パートナーであるなら、誤った道に進んだ相手を止めるべきです。けれどあなたは止めなかった。それどころか、兄さんと共に悪事を重ねた。つまり、あなたは兄さんを支える存在ではなく、兄さんを墮落させる要因ですよね。」

「いい響き。まるで自分だけは正しい場所に立っているみたい。十年以上いなかったくせに、戻ってきた途端に審判者気取り？ 可愛いわね。遅刻してきた妹ちゃんのくせに、ずいぶん偉そう」

毒を含んだ声だった。しかし聡美は、嫌味を嫌味として処理しなかった。

「私がいなかった時間に、兄さんが何をしたのかは把握しています。だからこそ、私が責任を持って止めるんです」

聡美はクラモンに目配せしてオメガブレードを取り出した。

「便利な言葉。正す。救う。償わせる。どれも綺麗で、どれも気持ち悪い。あなた、自分がお兄ちゃんを取り戻したいだけなのに、それを正義みたいに飾るのが本当に上手」

アシェンブモンは肩をすくめた。

「あなたが欲しいのは、今ここにいるリョウスケじゃない。昔の、優しくて、頼れて、あなたに都合のいいお兄ちゃん」

「オメガブレードによる初期化は、兄さんを元の状態へ戻すための手段です。現在の兄さんは犯罪行為を繰り返し、危険なデータをロードし続けています。放置すれば被害は拡大します。よって、強制的な停止と初期化が最も合理的です」

「合理的い？ 素敵。あなた、思ったよりずっと乱暴なのね」

「必要なら乱暴にもなります」

聡美は即答した。

「兄さんが罪を償うなら、それでいい。償わないなら、償うまで打ちのめします。初期化して、拘束して、もう一度立たせます。何度でも」

「まあ、怖い。私よりよほど傲慢だわ」

聡美は少しだけ首を傾げた。

「傲慢なのは、あなたでは？」

「……なに？」

「あなたは先ほどから、兄さんを自分のものだと言っています」

聡美の声に、怒りはなかった。  
ただ、事実を照合する冷たさだけがあった。

「ですが、聞いた話では、兄さんとあなたが再会したのはごく最近のはずです。兄さんが私を復活させようとしていた時期、あなたは傍にいなかった」

アシェンブモンの笑みが、わずかに止まった。

ほんの一時。  
だが、その一瞬だけで十分だった。  
黄金が、彼女の足元で小さく跳ねた。

「兄さんはあなたを頼らず、一人で準備を進めていました。戦力も崩え、デジタルワールドへの攻撃も実行している、つまり、あなたは兄さんの隣にずっと居た側ではありませんよね？」

空気が、ぎしりと歪んだ。

アシェンブモンは笑っていた。  
けれど、その笑みはもう甘くない。  
薄く裂いた唇の形だけが、辛うじて笑顔の輪郭を保っている。

「……置いていかれた？」

低い声だった。

「兄さん、兄さん、兄さん……うるさいのよ。まるでその呼び方に権利証でもついているみたい。妹だから？ 家族だから？ 昔のあの人を知っているから？ だから今のリョウスケまで自分のものだと思っているの？」

「…？ 兄さんは私のものではありません」



お気に入りのぬいぐるみが壊れた日だった。  
抱きしめすぎて、連れ回しすぎて、転んだ拍子に縫い目が裂けたのだ。中の綿が覗き、小さな腕がだらりと垂れたその姿を見た瞬間、幼い聡美は世界が終わったように泣いた。

母は、新しいものを買ってあげると言ったけれど、聡美は首を振った。  
同じ形のものでは駄目だった。新しいものでは意味がなかった。

リョウスケは、そんな妹を黙って見ていた。何も言わず、泣き疲れた聡美が眠った後で、彼は壊れたぬいぐるみをそっと回収した。  
父の道具箱を開き、小さな針と糸、色の違う布切れ、細かな部品を机の上に並べる。  
裂けた縫い目を寄せ、綿を押し戻し、不格好な継ぎ当てを作っていた。縫い目は少し曲がっていたし、布の色も元とは違っていた。  
けれど、朝になって聡美が目覚めた時、ぬいぐるみは確かに戻ってきていた。

不恰好で、少しだけ以前と違う。  
それでも、捨てられずに帰ってきた。

「直った……」

聡美が呟くと、兄は少し照れたように顔を背けた。

「完全に元通りじゃないけどね。でも、壊れたからって終わりとは限らないだろ」

その言葉は、幼い聡美にとって魔法のようだった。壊れても、捨てなくていい。失っても、諦めなくていい。大切なものは、手を尽くせばもう一度抱きしめられる。  
その日から、兄は時々、聡美のために小さな人形の服を作るようになった。  
不器用なところもあったが、聡美にとってはどれも宝物だ。  
別の日、リョウスケは聡美にこう言った。聡美がいじめっ子の同級生を殴り倒して母や相手の親に怒られた日だ。

「この世界には色んな人間がいて、色んな原因で、色んな悪事を働くだろう」

それは、まだ幼い聡美には少し難しい話だった。  
けれどリョウスケは、子ども扱いせずに続けた。

「でも一つだけ信じて欲しい。良い人は、悪い人より少しばかり多いんだ」

「どうして？」

「そうでなければ、人類なんて数百年、数千年、数万年前に、とっくに自分たちを滅ぼしていたはずだから」

その言葉を、聡美は忘れなかった。

世界は怖い。人は間違える。善意だけで生きていけるほど、何もかもが簡単ではない。  
それでも、良い人の方が少しだけ多い。  
だから世界はまだ続いている。

リョウスケはもう一つ教えてくれた。

「人の一生には、三回の成長がある」

一回目は、善と悪を理解すること。  
二回目は、善と悪だけではないと理解すること。  
三回目は、善と悪がないと承知した上で、自分の信じたことを貫き、その責任を持てるようになること。

それは、両親から受け取った言葉の受け売りだったのかもしれない。  
けれど聡美にとっては、兄から与えられた言葉だった。

壊れたぬいぐるみを直してくれた兄。  
世界を信じるための言葉をくれた兄。  
善悪だけでは測れないものがあると教えてくれた兄。

だからこそ、今の兄を放っておくことはできなかった。

彼が何を信じているのか、何のために動いているのか、聡美には分からない。  
それでも、かつて自分に世界の見方を教えてくれた兄が、自分自身を壊したまま歩き続けているのなら。  
今度は、自分が直す番だ。



まだ彼女が、シューモンだった頃のことを。  
そこは、機械系デジモン達が支配する工業地帯だった。空はいつも煤け、地面には油と鉄粉が染み込み、巨大な煙突からは休むことなく黒い煙が吐き出されていた。歯車の音。プレス機の轟音。管理用デジモンの無機質な命令。拉致された弱いデジモン達は、そこで部品を運ばされ、壊れた装置を磨かされ、終わりのない労働に組み込まれている。  
シューモンも、その中にいた。工場の片隅で埃を被り、役に立たなければ廃材の山に放り込まれるだけの存在。いつかここから出ていく。もっと高い場所へ行く。もっと強く、美しく、誰にも見下ろされないデジモンになる。そう思いながら、機械油の匂いが染みついた工場の隅で息を潜めていた。そこへ、子どものリョウスケが逃げ込んできた。  
息は荒く、頬には擦り傷があり、足取りは今にも崩れそうだった。  
突然放り込まれた異世界でデジモンに追われ、一人きりで生き延びるには、彼はあまりにも幼かった。  
シューモンはその姿を見て、まず同情しなかった。選ばれし子供。その言葉が、彼女の胸の奥で甘く鳴った。世界を救うために呼ばれた人間。特別な役目を持ち、特別な可能性を持つ子ども。そのパートナーになれば、自分ももっと高い場所へ行ける。今のうちに懐柔してしまえば、きっと都合がいい。  
疲れ切った子どもは扱いやすい。逃げ場のない子どもは、差し出された手を疑いきれない。ついでに、顔も悪くなかった。だからシューモンは、彼を助けた。

「助けてあげる」

これは未来への投資であり、この錆びた檻から抜け出すための小さな賭けだった。リョウスケは、すぐにそれを見抜いた。彼はシューモンの差し出した手を見て、弱々しく笑った。

「キミこそ助けて欲しいんでしょ」

シューモンは、一瞬だけ黙った。そして笑った。リョウスケは、震える手でその手を取った。不安と恐怖の奥に、まだ濁っていない野心があった。生き延びるためなら使えるものは使うという、子どもらしからぬ冷たさがあった。それでいて、完全には擦り切れていない柔らかさも残っていた。シューモンは、その歪な混ざり方を美しいと思った。

「いいわ。なら約束しましょう」

彼女は、わざと偉そうに言った。

「私はあなたに未来をあげる。その代わり、あなたは私をもっと高いところまで連れていきなさい」

リョウスケは頷いた。

それが、二人の始まりだった。

綺麗な絆などではない。  
運命的な出会いなどでもない。  
打算と利害と、少しばかりの好奇心で結ばれた、不格好な共闘関係。  
それからは、デジモンに追われた時も、飢えと疲労で彼が膝をついた時も、仲間達と合流してからも、彼女は彼の傍にいた。

彼を利用すると決めたからには、最後まで使い切るつもりだった。

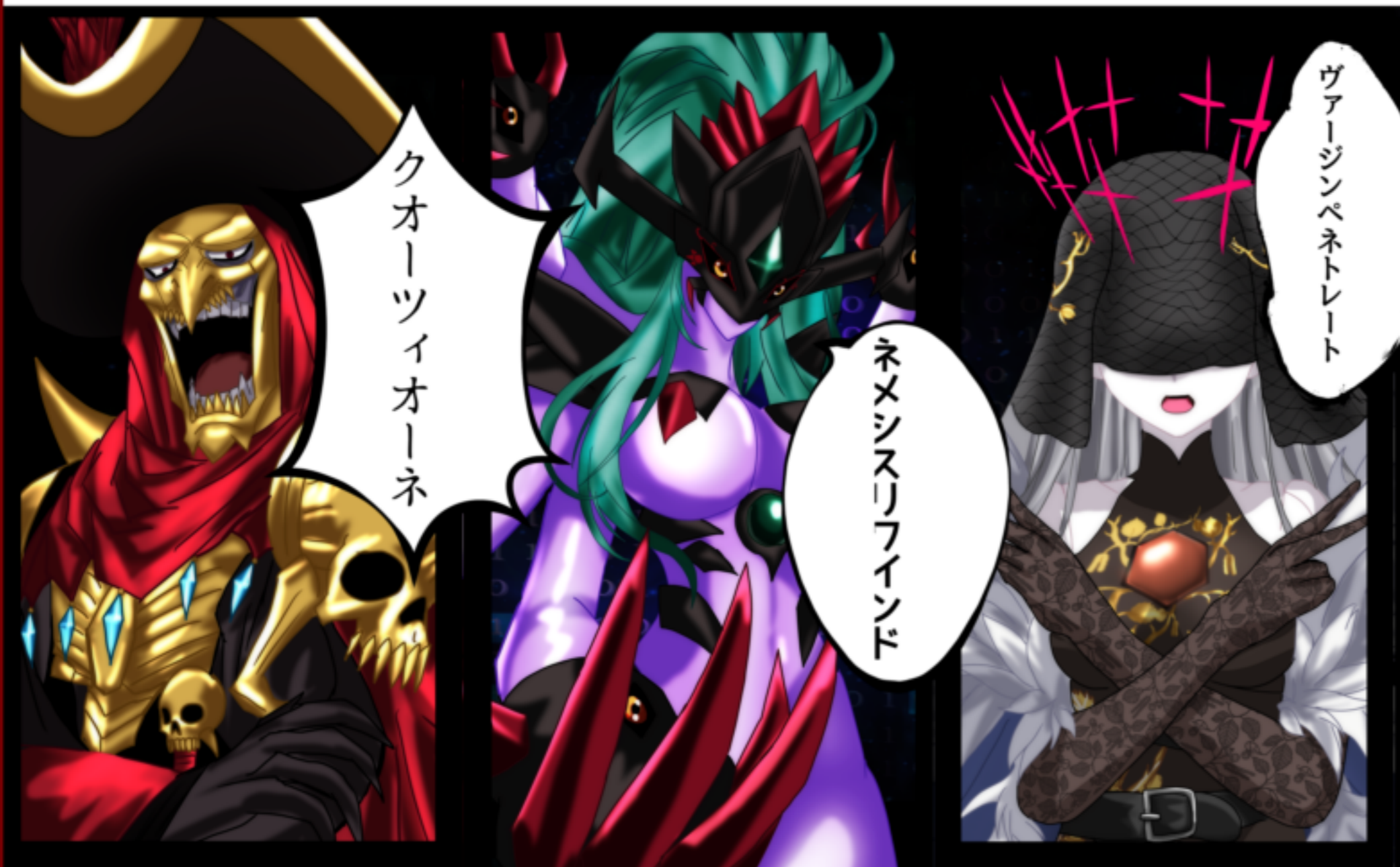
そしてリョウスケもまた、彼女を道具としては扱わなかった。彼はシューモンの損傷を気にした。自分が傷ついても、彼女の綻びを直そうとした。  
戦いの後、破れた布地を不器用に縫い、汚れた部分を拭い、どうしてもいいはずの飾りを拾い集めた。

気に入らなかった。

なのに、いつの間にかシューモンは、その手を待つようになっていた。

リョウスケの外見が好きだった。  
生意気な目が好きだった。  
皮肉を言う口が好きだった。  
小さな身体に不釣り合いな野心が好きだった。  
そのくせ、自分に向ける妙な献身が好きだった。

戦いの末、遂には自分をサンドリモンへと至らせた。灰かぶりの城。ガラスの靴。使い魔達。舞踏会という名の武闘大会。王子様を探すための、華やかで傲慢な童話の姿。  
その姿に至った時、シューモンは初めて理解した。  
自分は、王子様を待っていたのではない。もう、見つけていたのだ。  
それは清廉な英雄ではなかったし、白馬に乗った理想の王子でもなかった。  
皮肉屋で、野心家で、こちらの打算を見抜いて利用し返す、ろくでもない人間の子もだった。けれど彼は、彼女を錆と埃の中から連れ出し、舞踏会の光の下へ立たせた。



聡美とアシェンブモンの戦いが、互いの熾烈を極めたその時、ダークエリアの闇そのものを押し潰すような重い気配が落ちてきた。黄金と黒に彩られた魔人が、怨念を引きずりながら戦場へ割り込む。ボルトバウタモン、リョウスケとアシェンブモンを追ってきたのだ。

振り下ろされた剣が、ダークエリアの地面を割る。亀裂が走り、砕けたデータが黒い火花となって散る。直撃を避けたアシェンブモンの足元で、ゴールドデジゾイドの靴が硬い音を立てた。

ボルトバウタモンの次撃が迫る瞬間、聡美はそこへ踏み込んだ。ケラモン-傲慢の絆-の影が、彼女の足下で膨れ上がる。

影は床に落ちた暗がりのままではいられず、巨大な輪郭を持つ怪物のようにせり上がった。牙。腕。節くれだった指。空間を抱え込むほどの質量を持つエネルギー体が、ボルトバウタモンの刃を横から噛み止める。

アシェンブモンのゴールドデジゾイドが、彼女の踵から液体のように流れ出した。金は床を這い、薄い刃になり、細い鎖になり、鋭い杭になって戦場へ差し込まれていく。真正面から殴り合うためではない。戦場の角度を変えるためだった。

ボルトバウタモンの踏み込みに、金の鎖が絡む。ほんのわずか、重心がずれ、ずれた刃はアシェンブモンではなく、聡美の影へ吸い寄せられた。影の怪物がそれを受け止めるが、今度はアシェンブモンの『アメミット』が強襲する。

単純な力では、アシェンブモンが最も劣るが、ロードしたデジモンの力でなんとか牽制していた。

ボルトバウタモンの「スピエディーニ」が、再び飛翔する。今度の一撃は、リョウスケのいる方向へ流れていた。

聡美の動きが変わる。優先順位の再計算だった。ボルトバウタモンを放置すれば、兄に刃が届く。アシェンブモンを追えば、乱入者を止める手が遅れる。ならば、先に乱入者の方を片付けよう。

ケラモン-傲慢の絆-の影が巨大に開く。アーマゲモンを思わせるエネルギーの顎が、ボルトバウタモンの胴体へ食らいついた。骨のような装甲が悲鳴を上げる。

ボルトバウタモンはそのまま影ごとケラモンを叩き割ろうとするが、複腕で腕を掴まれ、『カタストロフィキャノン』を接射されて、装甲が剥がれる。怨念の出力が揺らぐ。

アシェンブモンは、その瞬間を見ていた。どうやら聡美のお陰でボルトバウタモンさん退けられそうだ。黄金の靴音が、いつの間にか消えていた。

戦闘が続き、既にボルトバウタモンの敗北は決定的なものとなった。初めて膝をついた。剣が床へ突き刺さり、指先が痙攣するように震える。

聡美は追撃の姿勢を取ったまま、ボルトバウタモンを見据える。

勝利ではない。

だが、この乱入者はもう長くはない。

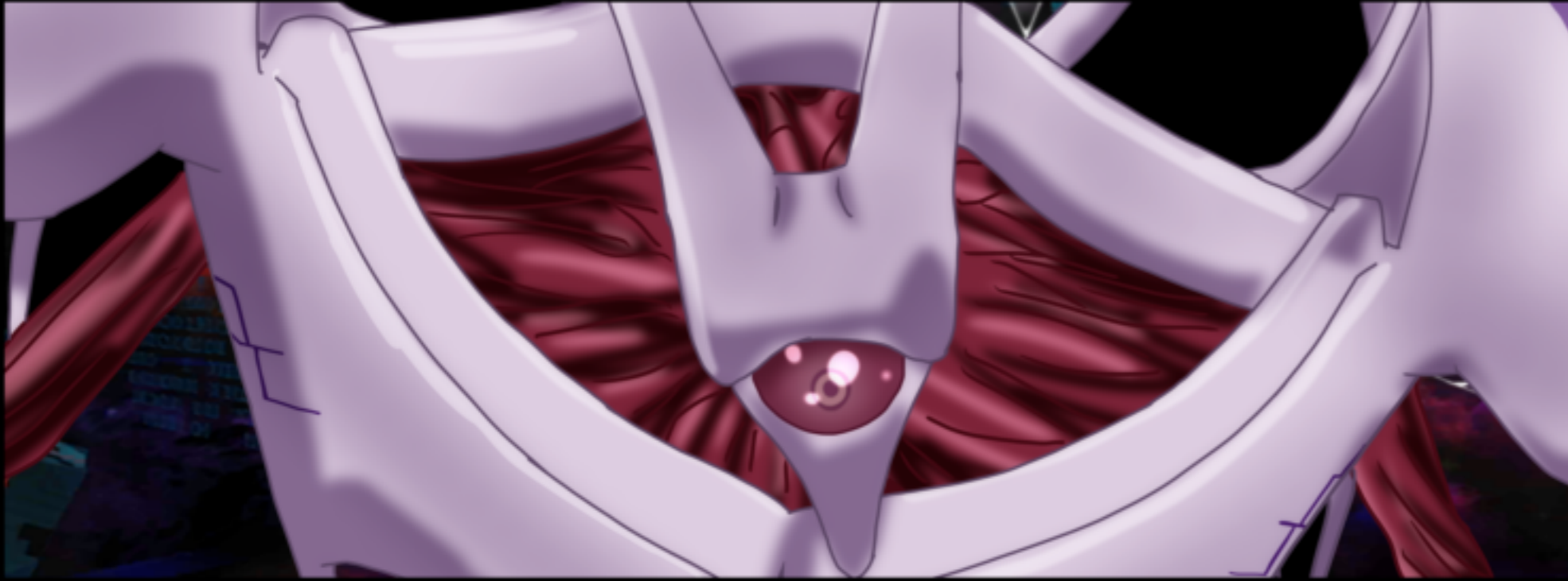
聡美の意識は、瀕死のボルトバウタモンへ向いている。

次に兄を止めるため、戦場をどう処理するべきかを計算している。

アシェンブモンの姿が消えたことも、戦場の端に残されたわずかな気配も、今この瞬間の優先順位からは外れていた。

ダークエリアの空間が、音もなく歪む。

聡美はまだ知らない。自分がボルトバウタモンを追い詰めたこの瞬間こそ、最も隙ができていたことを。



ボルトパウタモンは、もう戦える状態ではなかった。  
ケラモン-傲慢の絆-は、魔人の体を確実に削り取っている。  
腕は断たれ、足は斬り落とされ、怨念に動かされていた身体は、もはや形を保つだけで限界に近い。  
ケラモン-傲慢の絆-の背後から、巨大なエネルギー体がせり上がり、瀕死のボルトパウタモンを戦場へ縫い止めた。  
逃げることも、倒れることも許さない。  
その場で終われと命じるように、異形の圧力が魔人を押さえ込む。

『アルティメットフレア』

放たれたエネルギー波が、ボルトパウタモンの身体を焼く。  
咆哮は途切れ、装甲は砕け、黒いデータが血煙のように散る。深怨の命令に引きずられていた身体は、ようやく沈黙へ近づいていった。

聡美はそれを見届ける。

『流石に頑丈ですね』

彼女の目的は、ボルトパウタモンを倒すことではなかった。  
隠れたアシェンブモン。そして、その傍にいないはずのリョウスケ。  
聡美は視線を戦場の端へ走らせた。金の靴音は消えている。アシェンブモンの気配も薄い。だが逃げたとは思わなかった。あのデジモンが、ただ負けを認めて退くはずがない。

次に潰すべき対象を探し、聡美の思考が戦場をなぞる。その一瞬だった。時空が破れた。  
転移の気配ではない。ダークエリアの空間に、外側から爪を立て、無理矢理こじ開けるような歪みだった。  
聡美が振り向くより早く、裂け目の向こうに異形の輪郭が浮かぶ。

パラレルモン。

空間の断面から覗くその姿は、戦場に降り立ったというより、別の世界の隙間からこちらを観測しているようだった。

リョウスケだけが、それを見抜いた。彼の目が細くなる。  
驚きはあった。だが、それは恐怖ではない。未知の怪物を前にした反応ではなく、すでに知識として持っている異常を目撃した時の顔だった。パラレルモン。空間を渡り、対象を別位相へ引き込む厄介な存在。

リョウスケは、聡美を見る。

妹は油断していた。いや、正確には、油断ではない。彼女は正しく優先順位を組み立てていた。ボルトパウタモンを処理し、次にアシェンブモンとリョウスケを追う。その判断自体は間違っていない。ただ、パラレルモンはその外側から来た。戦場の駆け引きではなく、盤面そのものの外から手を伸ばしてきた。  
パラレルモンの核に、禍々しい光が灯る。空間が沈み、周囲のデータが吸い込まれるように歪む。

アブソーベント・バン。

放たれた光線が、聡美へ向かって迫る。ケラモン-傲慢の絆-の影が反応する。巨大なエネルギー体が、主を守るように前へ出た。だが、その攻撃は単なる破壊ではなかった。聡美の周囲が歪む。次の瞬間、ケラモンの姿が戦場から引き剥がされた。声を上げる暇もない。抵抗するための一拍すらない。ケラモン-傲慢の絆-は、時空の裂け目に捕らえられ、そのままパラレルモンの空間へと幽閉された。

戦場に、奇妙な静けさが落ちる。ボルトパウタモンは瀕死。聡美は消えた。

聡美の実力なら、即座に詰むことはない。  
パラレルモンの空間に囚われたとしても、彼女ならば自力でどうにかする可能性が高い。少なくとも、今ここで自分が全てを投げ出して追う必要はない。

それに、まだ終わっていないものがある。

瀕死のボルトパウタモン。深怨なる手の傀儡。これは今後必要になるだろう。



聡美が消えた後、戦場には奇妙な静けさがあった。パラレルモンに引きずり込まれたケラモン-傲慢の絆-は、もうこの場にはいない。

残されたのは、瀕死のボルトバウタモンと、それを見下ろすリョウスケだけだった。いや、もう一体。姿を消していた者がいる。ボルトバウタモンは、まだ完全には死んでいなかった。

斬り落とされた腕。断たれた脚。裂かれた胴。それでも、ダークエリアに満ちる怨念のデータをかき集め、無理やり自身を繋ぎ直そうとしていた。黒い残滓が傷口へ集まり、砕けた装甲の隙間を埋めるように、怨嗟が塞く。

リョウスケは、それを黙って見ている。焦りはなく、逃げる素振りもない。その時、銃声が鳴った。弾丸は闇の中から飛来し、聡美の攻撃で露出していたボルトバウタモンのデジコアを撃ち抜いた。再生しかけていた怨念の流れが、そこで止まる。

集まりかけた黒いデータがほどけ、傷口から逆流するように散っていく。

ボルトバウタモンの身体が、びくりと震えた。  
闇が揺らぎ、何もなかったはずの場所に、赤い影が滲むように現れた。

エクスファングモン。アシェンプモンが退化した姿だった。

彼女は逃げていたのではない。負けを認めて退いたのでもない。ただ、最も美味しい瞬間まで姿を消していた。

ボルトバウタモンの身体が崩れる。  
深怨なる手に動かされていた魔人は、ようやく糸を切られた操り人形のように倒れ込んだ。

「ロードしよう」

リョウスケが言った。エクスファングモンは、倒れた魔人へ近づく。  
ボルトバウタモンを倒したところで、深怨なる手そのものが滅びるわけではない。だが、残骸には確かに力の残滓が残っている。

黒いデータが引き剥がされ、エクスファングモンの内側へ沈んでいく。

それでも、残滓であっても力は力だった。深怨なる手の力の一端。  
それはエクスファングモンへ、そしてリョウスケへと流れ込む。

「成程、これが深怨なる手の力…実に面白いな」



聡美が意識を取り戻した時、最初に目へ飛び込んできたのは、白だった。壁も、床も、天井も。手を伸ばせばそのまま吸い込まれてしまいそうなほど、何もかもが白を基調として統一されている。

そこにはダークエリアに満ちていた濁った闇も、死者の国めいた冷たさもない。あるのは、あまりにも整いすぎた静寂と、妙に乾いた清潔感だけだった。

聡美はすぐに身を起こすと傷の具合を確かめた。手足は動くし意識も明瞭だ。

そして何より、傍らにはクラモンがいた。少なくとも、自分だけがここへ投げ込まれたわけではない。ならば百人力だろう。

だが、それ以外には何もなかった。人気がない。物音もない。生き物の気配どころか、空調の唸りすら聞こえない。白で統一された空間は、居住のために作られた部屋というより、誰かの趣味の悪い標本箱のようだった。

聡美とクラモンは、しばらくその空間を調べ続けた。壁面を叩いてみる継ぎ目を探す。床を踏み鳴らし、隠し部屋や異常な反響がないかを確かめる。

目につくものは片端から確かめたが、めぼしい手掛かりは一つとしても見つからない。

この空間には、情報が無い。あまりにも綺麗に整理されすぎている。

やがて二人の視線は、部屋の奥にある巨大な扉へ向いた。調査に進展がない以上、次へ進む以外の選択肢はない。

聡美は短く息を吐き、クラモンと視線を合わせる。

そして二人は、その扉をくぐった。だが、その先に広がっていたものも、拍子抜けするほど似たような光景だった。

やはり白い。壁も、床も、空気すら白に侵食されたような、無機質な空間。構造こそわずかに違うものの、ここもまた、感情や生活感というものを根こそぎ削ぎ落とされた部屋であることに変わりはない。

無駄足か、と聡美は眉を寄せた。この異常な空間は、一つの牢獄ではなく、同じ性質を持つ部屋が幾つも連なっているのかもしれない。そう考えた時だった。

背後で、扉の開く音がした。聡美とクラモンは反射的に身構え、振り返る。

現れたのは、見知らぬ少女だった。

背丈は聡美より少し低い。白衣を羽織り、明るい色の長い髪を揺らしている。年齢もそう離れてはいないように見えた。実年齢から言えば聡美は20代だろうが見た目は10代である。

少なくとも、パラレルモンのような異形ではない。だが、この場所に現れた以上、ただの無関係な人間だと断じることでもできなかった。

パラレルモンが、自分以外の人間も攫ってきたのではないか。もしそうなら、目の前の少女もまた被害者だ。事情を知らず、この得体の知れない白い空間へ放り込まれた一人なのかもしれない。

聡美は警戒を解かないまま、それでも一歩前へ出る。敵意は見せず、しかし無防備にもならず。相手の反応を見極められるだけの距離を保ちながら、まずは接触を試みることにした。

この奇妙な空間で、ようやく見つけた自分たち以外の存在だった。

聡美は、その白衣の少女へ向かって口を開く。

「こんにちは。お互い災難ですね、あなたは？」

「私は七津真、君たちは？」